

熱河遺跡保存の急務

東京帝國大學名
譽教授工學博士

伊 東 忠 太

熱河遺蹟とは滿洲國の熱河に於ける古代遺蹟を指すのであるが、其の遺蹟保存の急務を説く前に、遺蹟其のものゝ事情を一應明かにして置きたいと思ふ。

熱河の事に就ては既に各方面から話し盡されて、餘り珍しくもないかと思ふが、順序として先づ、大體の地理を言ふと、熱河省は滿洲國の西南隅に位置し、首府は承德で、灤河の小支流たる武烈河が其の東方を流れてゐる。交通路は曾て自動車に依つたが、今では奉山線の錦縣から分岐する錦承線の鐵路が、金嶺寺・朝陽・葉柏壽・凌源・平泉の各驛を経て全通してゐる。故に、旅行は甚だ簡單である。將來は恐らく其の鐵路が北平にまでも通ずるであらう。昔は内蒙古に屬して人跡甚だ稀なる所であつたが、今では相當の都市となつて、追々發展に赴いてゐる。此の承德市内に清朝の康熙帝が建てた有名な避暑山莊がある。これは康熙四十二年に築かれた離宮であつて、之を避暑山莊と名づけたのは、夏涼し

く冬暖いといふ所から來てゐる。尤も涼しいとは云つても比較上の話で、暑氣は相當烈しいが、北平に比べれば遙に涼しいのである。冬暖いと云ふ點では熱河の水源地に温泉が涌出してゐて、それが武烈河の水流中に注ぎ込んでゐるから、冬も凍結しないと傳説されてゐるが、それは謬説であつて、私は確にそれが氷つてゐるのを見た。併し兎に角さうした形勝の地であるので康熙帝が此の地に離宮を築造されたといふのが古來の通説になつてゐる。私は其の現地を目撃し、且又歴史的方面から考察して、康熙帝が茲に離宮を建設された事に付き、別個の理由を考へてゐるが、其の事は後に譲つて、其の前に熱河の歴史を述べたい。

承德に近く萬里の長城がある。長城と云ふと直ぐに秦の始皇のものが聯想されるが、今在るのは古いものではない。始皇帝の萬里の長城についての委しい事は分つてゐないが、少くとも熱河の地を貫通して遠く遼東にまで到つてゐたらしい。此の地方は古く周漢の時代には、匈奴・東胡の巢窟であつて、文化は全然無く、始皇帝の時一たび支那領に編入されたが、忽ち制御力を失ひ、依然として又、舊の如く匈奴の巢になつてゐた。所謂五胡十六國の時代には、燕が此の地に起つて勢力を振つたが、これ亦異民族であつた。當時の都は今の朝陽である。その後、唐の時代に至つて、又一時支那の勢力範圍に入つたが、間もなく唐は之を抛棄し、契丹民族が襲ふて之を巢窟とした。やがて其の中から遼が新に興つて之

を領し、中京を置いて統治した。遂に次いで又金が之を領し、同じく中京を置いて治めたが、これ亦女真民族の國であつて、漢文化は入らなかつた。金滅んで元代つて之を領し、明に至つて又一時領内に入れたが、これ亦遂に抛棄し去つた。所謂る王者は夷を治めず、夷を以て夷を制するのが、支那歷朝の踏襲政策だつたのである。故に明代にも熱河の地へは漢文化が入らず、清朝までは内蒙古と稱し、化外の地として漢式文化の潤ひを受けなかつた、といふのが熱河の歴史である。此の地方が漢文化の交渉を受けたのは清朝の事であつて、其の動機は愛親覺羅氏が滿洲（一説には朝鮮の會寧だともいふ）から起り、西へ西へと進んで遼陽・奉天を占め、次第に勢ひを伸ばして、明國が恰も其の末期に及んで内亂に悩んでゐたのに乘じ、遂に北京を乗取つて、代つて中原を制したのである。見方によつては、これは確かに明の衰勢に乗じたものであるが、併し明を亡滅せしめた裏面には別に重大問題がある。それは愛親覺羅氏と蒙古との結托である。愛親覺羅氏が餘り優勢でもない兵力を以て、勢ひを制し得たのは、全く此の蒙古との結托があつたからで、若し蒙古の輿力が無かつたならば、清朝の草創は不可能だつたのである。元來蒙古は一たび熱河の地に踏み込んで中京を占領したのを、撃退されて怨を吞みつゝ引き上げたのであるから、好機會の乘ずべきものがあれば、之を取りたい心理状態にあつた。そこで其れを熟知してゐる愛親覺羅氏が巧に之を利用して結托し、遂に中京を其の手に入れたのであるが、併しながら其の

結果に於て蒙古が何を酬いられたかといふと、殆ど何等の分け前にも與らず、所謂旨い汁を吸つたのは愛親覺羅氏のみであるから、蒙古は勿論之を快く思はなかつた。それで清朝は遂に明を滅ぼして、北京に都を定めたものゝ、不安なのは蒙古の嚮背であつて、何とか之を懐柔しなければ、安心が出来ない立場にあつたので、第一に先づ、蒙古人の崇拜する喇嘛教を崇敬する事を始めた。これは、西藏に本山を有する宗教であるが、清朝はそれを入れて國教とすると共に、又、帝室歸依の宗教としたので、其の勢ひの及ぶ所、喇嘛教は忽ち廣範圍に擴がつた。斯くの如くに、清朝は喇嘛教を入れて蒙古人の歡心を買つたが、只それだけでは足りないもので、康熙帝は千年の計として、湖北内蒙古の何處かに離宮を造ることを考へた、それが即ち承德の避暑山莊である。と云ふと或は軽い意味に取れるかも知れぬが、私は之を上都としたものであると思ふ。曾て遼・金・元も上京を湖北に置いた歴史を持つてゐるが、凡そ異民族が支那本部に入つて天下を占めると、必ず上都を置いて、一旦事があつた時の、最後の據守點とする。此の事から考へると、康熙帝が承德に山莊を造つたのも、決して遊び半分の避暑の爲でなく、萬一北京が危急に迫つた場合、退いて此處で防がうといふ考へがあつての事と思はれるのである。それに又單に避暑の爲といふ軽い意味で離宮の建設候補地を撰むのならば、承德以外にも、つと涼しい所があらう、それを特に内蒙古の承德に撰んだのは、蒙古人（ツングース人、蒙古族）と接觸して、親和を圖る考へが

あつての事でなくてはならぬ。故に帝は此の離宮が出来て後は、毎年六月から九月までの間必ず出て来て、或は部族たちを集めて大遊宴を開き、又附近の大森林で壮大なる遊獵を催し、蠻族の大將たちと共に打ち寛いで樂むことを恒例とした。即ち一面之を懐柔すると共に、一面では之を威壓し、恩威並び行ふ方針で計畫したといふのが、抑も承德の地を撰んだ根本義であつたらうと思ふ。

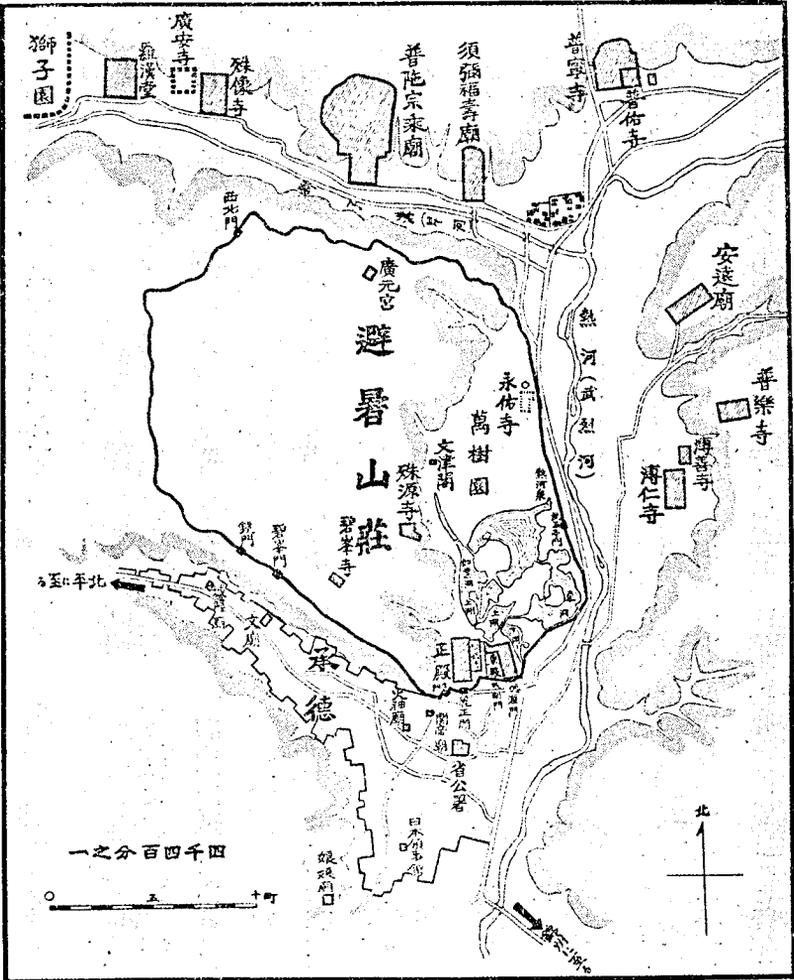
尤も土地が好いといふ事も、一つの條件であつたには相違ない。文獻に據ると、山莊を造る前に人を各方面に派して適地を物色させたといふ事實も存するのであつて、或る雇外國人に委嘱して地質を検査させた所、承德の水質が最も優れてゐたので、愈々此の地に決定したのでとも傳へられてゐる。私は特に各地を歩いて比較研究をしたのではないが、少くとも承德は四神相應の條件に殆ど合致する好地形であるかと思はれる。北方に山あり即ち玄武、東に河（武烈河）あり即ち青龍、西に大道（北京に通ずる）あり即ち白虎、南に汗池あり即ち朱雀といふ條件に概ね當つてゐるのである。勿論南方に池はないが、展望稍開け、灤河に至るまではズツと平地であつて、四神相應の地たるに背かない。恰も我が國の京都の地形に類してゐる。それでこんな事に縁起を擔ぐ支那人の好みにも合つてゐるのである。要するに承德が離宮の地に撰ばれたのは、偶然の事ではなく、深い意義が籠つてゐると直感させられるのである。

二



熱河及錦州地方地面圖

熱河遺跡保存の急務（伊東）



熱河離宮及伽藍圖

さて次は愈々避暑山莊の建築の話に移る事とする。

康熙帝は石の周壁を繞らした其一構への中に西殿を築くと同時に、又、池を穿ち庭園を造つて樂んだが、極質素な人であるから、華々しい事を好まず、従つて寺なども餘り建てなかつた。其の後康熙二十二年に至つて、溥仁寺・溥善寺が出来た。これが熱河に建てられた最初の喇嘛寺である。併しこれとも帝が自發的に造つたのではなく、由來を尋ねると、兩寺共に蒙古王が建立して獻じたものである。そこで康熙帝の治世には右の二箇寺の建立だけで終つた。次は雍正帝であるが、これは在位年間も短かつた上に、消極的な人であつたらしく、折角先代が造つた避暑山莊に一度も臨まず、殆ど何の爲す所も無く過ぎた。ところが三代目の乾隆帝は、聰明な上に、ハデ好きで、且つ文才もあり、甚だ多趣味な人であつたから、康熙帝の後を承けて避暑山莊を擴張した。其の動機は元來がハデ好きだつたからと云ふ點もあるが、別に裏面的動機とも見られるのは、曾て康熙帝の時、一時好意を寄せてゐた蒙古の諸藩が、其の後叛亂常なく、とかく邊境に事が多かつたので、或は西蒙古の喇嘛教に非常な優遇を與へて之を懐柔し、又、止むを得ない場合には征蒙軍を發して之を威壓する等、時に應じて對策を講ずる必要があつた事であつて、恐らくこれも乾隆帝を山莊に誘ふ一理由であつたと考へられる。故に必ずしも遊びたいばかりではなかつたらうと考へられるが、とにかく帝は其の在位六十年の間に、殆ど毎年缺かさず避暑

山莊に來てゐるのであつて其の紀行も文獻として傳はつてゐる。北京から古北口まで行くには四日間を要し、之に承德に至る迄の日數を加へると總計七日かゝるのであるが、遠く帝が離宮に行くと、諸藩主が皆祝賀に來て賑はひ、恩威並び行はれた。此の乾隆帝の長い在位の間に出來た建築が、二十年に普寧寺、二十四年に安遠廟、次に二十五年に普佑寺、三十一年に普樂寺、三十五年に普陀宗乘廟、三十七年に廣安寺、三十九年に殊像寺・羅漢堂、四十五年に須彌福壽廟等の諸寺院で、以上は數多い中の重要なものであるが、全部何れも喇嘛教の寺である。そして是等寺院の配置を見ると、多くの寺々で避暑山莊を守護してゐる形のあることが其の向き方で分る。即ち離宮を中央にして或る寺は南面し、或る寺は西南向してゐる。是等は地形上當然の事であるが、確に伽藍を以て離宮を守護する心理もあつたらうと想像されるのである。寺の外に宮殿も此の帝の治世に建て増されてゐるが、康熙帝の宮殿を西殿と呼ぶに對して、乾隆帝の時は東殿と呼ばれてゐる。

さて以上に述べた諸寺院が建築された動機に就て話したいのは、何れも皆偶然に出來たものではなく、それぞれ深い意味が存する事である。先づ普樂寺は蒙古の部族が新に歸順したのを嘉し、其の信仰を充たさんが爲に、西藏風喇嘛式を混和した伽藍として造られたものである。次に安遠廟は、遠く伊犁の蒙古民族が清朝に降つて來たので、乾隆帝は彼等に慰安の場所を與へるため、伊犁の喇嘛廟に形をな

ぞらへて造られたもので、此の二つは共に同様の因縁を持つてゐるのである。普佑寺は普寧寺の附屬とも見られるもので、さして大建築と云ふ程のものでもないが、これも八大寺の一つである。普寧寺の方は美しい大建築であつて、これは蒙古の西偏ツンガルが平定した記念として西藏の三摩耶廟に倣つて造つたものと云はれてゐる。其時まで間斷なく叛亂を繰返してゐた地方が歸順したから、普寧と名をつけたのである。又、須彌福壽廟は、規模こそ小さいが、最も重要な建築である。これは他の諸寺院が多く支那式建築と西藏式建築との混和の形であるのに對し、大體の規模が殆ど純西藏式、喇嘛式であつて、西藏バンチエンラマが態々熱河まで來て乾隆帝の七十の賀の喜びを述べに來たので、帝は之を嘉し、西藏の有名な伽藍の形に擬して造つたと云ふ特別の謂はれを持つてゐる建築である。次に、普陀宗乘廟は、規模も大きく、様式も殆ど西藏式と大差のないものであるが、これは乾隆帝の母の八十の賀儀に方々から祝意を述べに來た中に、藏蒙の諸藩も態々遠くから來て皆朝貢したので、帝が之を嘉して造つたものと云ふ。これは前藏のラッサの郊外にあるポタラの達賴喇嘛の廟に據つて作つたと云はれる規模堂々たる寺で、あれだけ規模の大きい寺院は、私の見た範圍内で、滿洲國にも支那にも比類の無い世界的大建築である。次に殊藏寺は建築として大したものでないが、乾隆帝は文殊菩薩の化身であるといふ信仰があつたため、本尊の一つとして安置してある獅子背上の文殊像の顔は、帝の顔に似せて造像

したものだと云はれてゐる。果して似てゐるのかどうかは分らないが、其の傳説が元で信仰の深い寺となつた。次に廣安寺は今跡形も無くなつてゐるが、これも蒙古族と因縁の深い西藏式の建築だつたと云ふ事である。羅漢堂は純粹支那式の建築で、喇嘛教趣味は餘りない。其の向ふに獅子園がある。周廻七里と書かれてゐる大きな構へのもので、今は既に荒廢してゐるが、歴史的には大切な所である。一説には、雍正帝がまだ若かつた時の邸で、乾隆帝は此處で生れたとも云はれてゐるのであつて、そんなわけで自分の生れた郷里であると云ふ所から、山莊へ來たと云ふ事も、或は有力な一原因であるかも知れない、と考へられてゐる。さてこれで大體八大寺の説明を了つた。以上に述べた中で、殊像寺と羅漢堂とは八大寺以外である。

三

次には前述諸建築の特徴・現状並びに其の保存の必要に就て一言する。

自分が最初に承德に行つたのは、もう大分以前であるが、其の時私は、見はるかす青山の間に美しい甍屋根が入り交つて構成する莊嚴美觀に接して思はず驚歎の聲をあげた。今までに方々の寺を見たが、此處程印象の深い處はない。立體的の曼陀羅圖といつていゝか何と云つていゝか、とにかく極彩色の美しい繪巻物を繰りひろげた感じであつて、人間世界の景色ではなく、恐らく蜃氣樓ではないかと思つた

位である。斯ういふと、或は私の誇張と思はれるかも知れぬが、決して誇張ではなく、實際世界に餘り多く比を見ない壯觀であつた。ところが二度目に行つて見た時には惜しい哉それが大分廢類してゐた。前に私は八大寺建築の多くが、西藏式と支那式との混淆であることを言つたが、打見た所、概して西藏式は餘り濃厚でなく、取扱ひ方は多く支那式である。そして内部は殆ど全く西藏式で出来上つてゐる。其の中でも須彌壇などは他に類の無いデザインであつて、ちよつと説明に困る位である。典據は佛典から出てゐるのであらうと思ふが、よく分らない、とにかく喇嘛教的である。安遠廟の本堂は伊犁の喇嘛寺の形を取つたものだと思ふ事は前にも述べたが、眞偽は別問題として、實に物凄い程大きな、又、神祕な感じのある建築である。中へ入つて見ると、なほ一層其の感じが深い。屋根は黒瓦で、従つて眞黒々としてゐるのが物凄いのである。普寧寺は美しい建築である。今では廢殘の姿であるが、本堂の屋根は黄瓦で、見た感じが非常に美しい。これも西藏趣味と支那趣味との混合した形である。塔も西藏式で、支那式塔とは全然違つてゐる。そして其の中には有名な木造の大佛像がある。高さ七丈二尺、第一流の巨像である。千手千眼の觀音像で、作もわるくはない。清朝の彫刻としては上出來の部に屬すると思ふ。

須彌福壽廟は、全體の規模が他のものと大分違つてゐる。殊に其の紅臺は注目すべきものである。こ

これは現代建築のビルディングのやうに、壁を高く築いた方形の建築で、其の平な面に多くの窓が並んであいてゐる。殆んど純粹に近い西藏式建築であつて、到る所に其の手法が見えてゐる。純支那式も僅に交つてゐるから、嚴格に言へば、これ亦混合建築であるが、主要部は皆西藏式である。尙此處には又瑠瑠寶塔と呼ばれるものがあるが、これも美しい建築であつて、デザインも普通の支那建築にはない様式である。別に又、西藏塔の一例式として、瓢箪形をした塔もある。これは西藏以外何處にもないものである。

普陀宗乘廟も外觀は紅臺式である。そして其の附近には點々として多くの僧坊がある。昔は此處の山にも相當樹木があつたが、今は禿山となつて了つて、凡てが露骨な感じを與へる。此の廟は西藏ラッサのポタラ廟に範を取つたものと云はれ、承德へ行けば純粹西藏式の建築が見られると昔は言つたものであるが、實際にくらべて見ると、餘程味が違ふのであつて、何と云つても本場の方が遙に堂々としてゐる。外には到底類があるまいと思はれる程莊嚴なものである。比較的文化的低い國の、而も相當古い時代に、どうしてあの様な大伽藍を作り得たのだらうと、只々驚かれる。さて説明が大分横へ外れたが、普陀宗乘廟の紅臺の上には、純支那式の小亭がある。この屋根は傳説によると黄金を以て葺き蔽うてあると云はれてゐる。恐らく實は黄瓦で葺いたものであらうと思つてゐたが、それは思ひ違ひで、實際に

行つて見ると、銅瓦の上へ延板を張つた程度に鍍金を施したものであつた。つまり金鍍金の瓦であつて、これは、須彌福壽廟の屋根も同様である。

此の須彌福壽廟に就いては、前に述べることを忘れたが、紅臺を中心として其處に現されてゐるマツスのコンポジションは實に面白い。殊に西藏塔が並んでゐる景觀は異國情緒的であつて、それを見てゐると、滿洲國に居ると云ふ感じがせず、西藏か、蒙古か、何處か遠い外國に居るやうな感じがする。

四

さて以上で建築の特徴の大體を述べたが、其保存の急務といふ事を主題とした關係上、次には其れに言及しよう。

私は明治三十四年に初めて熱河の遺蹟の事を或る僧侶から聞いて、是非一度行つて見たいと思ひ乍ら、機會が得られないので、寫真を見て僅に満足してゐたのであるが、其の後遂に機會を得て行つて見ると、其の保存状態は實に豫想以外であつて、現在の有様は、往年の寫真と比べて非常な相違である。樹木などは殆ど無くなつて、見渡した所、丸裸の光景である。建築物も多くは散々に壊れて了つて、中には滅却し盡したのもあり、僅の間に、よくまあこんな廢殘したものだと歎かれる。土地の人は湯玉麟が破壊したのであると云ふがウソである。歴史を辿ると、乾隆帝の時までは毎年手入をしたが、次

の嘉慶帝になると、只舊慣に依つて山莊へ出て來たといふだけで、何等積極的な仕事をせず、道光帝以後に至つては、殆んど熱河の地を踏まないと云つてもいい有様で、只僅に道光帝は、北京が戰禍に曝されんとした時に、身を以て熱河に蒙塵し、一年間暮らした事があつただけである。其れより後は宣統帝に至るまで、一回も熱河に來た天子はなく、其の長い間に樹林は總て丸坊主にされ、山莊は荒るゝがままに放任されて、遂に今日見るが如き廢殘状態に陥つたのである。而も近年は又、其の破壊の程度が加速度的であつて、續々入り込んで來る外國人が、破壊の手傳ひをしてゐる。即ち珍しい青瓦や黄瓦を打ち落しては持ち歸り、甚だしいのは堂内の佛像から、壁畫までも剝ぎ取つて持歸ると云ふ風で、散々に荒されてゐるのである。而も之に對して制御に當る監理者は全伽藍を通じて一人もなく、僅に數名の喇嘛僧が飢え疲れて横たはつてゐるだけである。是等の喇嘛僧は、熱河省廳から、一人宛て一ヶ月二圓五十錢の補給を得て、辛うじて露命を繋いでゐるのであつて、其の外には、偶々出て來る參詣人から貰ふ案内料が、わびしい餘得である。斯ういふ有様であるから、凡ては荒れ放題に荒れて行くのであつて、或る所では壁が崩れて、其の上に生えた實生の松の木が雲を凌いで亭々として聳えてゐる。又或る所では、屋根の腐朽した所から木が生えて森林を成してゐる。屋上庭園ではなくして、屋上森林であると云ふと、或は誇張のやうに聞えるかも知れぬが、實際二三間の高さの樹が屋上に密生し、蛇や小獸が其の

間を縫ふて遊び廻つてゐる。勿論柱は落ち、壁は崩れて、實に慘澹たる姿である。若し此の儘十數年も拋棄して置けば、恐らくもつと壞崩するであらうし、なほ數十年も経過したならば、全く跡形もなく廢滅して了ふだらうと案ぜられる。實に遺憾に堪へない事である。

幸にして滿洲國の建設後、日滿要人の斡旋で日滿（滿日）文化協會が組織せられ、執政溥儀殿下を總裁に戴き鄭孝胥が會長となつて、若干の役員を選抜し、滿洲文化の開發を促進するため、種々の事業計畫を立て、進言する事となり、其の實現費用は、日本側からも出すが、大體滿洲國政府で賄ふといふ建前の下に、其の第一回の會議では、清朝實録の出版、奉天に國立博物館の設立、それに熱河遺蹟の保存と以上三つの決議をして、滿洲國政府に建議した。何せよ執政が總裁で、首相が會長になつてゐる會からの建議であるから、政府としては金がかかる事で迷惑ながらも、イヤとは言へぬ義理で、澁々ながら先づ清朝實録を出版し、博物館も開館して現に効果を擧げてゐるが、熱河の遺蹟保存は着手しないで、今なほ放棄されてゐる。最初此の遺蹟の保存については、私が依頼されて計畫を立てたのであるが、其の時は到底全部の保存といふ事は出来ないから、廢殘して手の附けられぬものは拋棄し、其の他のものは、現狀以上に破損せぬやうに手を加へるか、又、創立當時の姿に復元するかと云ふ事にして、其の經費を凡そ五百萬圓と見積り、十年乃至三十年の繼續事業として、いゝから、是非此の計畫通り實行し

て貰ひたいといふ建議をした。ところが當時は滿洲國當事者の方でも大分乘氣のやうであつたが、其の後金の事で行惱みとなり、爾來なほ未だ要領を得ないのみならず、最近遂に、到底金の出所がないから修理は止めるといふ事に決定された。これは實に残念な事で、單に計畫を立てた私個人としての問題に止まらず、滿洲國のため、東洋のため、否、全世界の爲にも返す返す悲むべき事である。當時私は其の意味を、噛んで含めるやうに言葉を盡して述べたのであるが、遂に了解して貰へなかつた。

今更又それを繰返して述べ立てると愚痴話になるが、此の伽藍及び離宮の保存は、嘗に建築學者としての自分の立場から觀て急要であるばかりでなく、第一にこれは滿洲國文化史上唯一の寶物である。故に若し日本ならば何はさし措き、特別保護建造物としての適當な保存法を取るべきものである。現に法隆寺は百七十萬圓の豫算で、十二年かゝつて大修理を加へた。假令何百圓の金、何年の日子を費しても、そんな事に拘つて此の貴重な寶物を壊滅せしめるといふ事はない。そこで私が計畫を立てた時に溥儀執政に謁見して其の事を述べると、執政は、あれは自分として思ひ出の深い大切な建築であるから、必ず完成するやうに努力して欲しい、と云はれた。それで私は自分としても是非修理を加へたい、あれは滿洲國の祖先が心血を注いで造られたものであるから、今にして其の遺業を放棄し、壊滅してもどうなつても構はないといふ事は出来ない、又更に考へると、離宮及び伽藍の建設は、康熙・乾隆・二帝の

國策上の意味も加はつてゐる事であるから、其の保存は活きた歴史を残す所以であつて、歴史的・文化的に滿洲國の體面から考へても棄て置けない貴重な史料である、といふ事を呉々も進言した。

實際建築上から云つて、あれ程世界的に面白い建築はない。それは前にも述べた通り、支那式と西藏式とを巧に融合的調和した點である。尤も中には多少無理なものもあるが、概して其の混和は成功してゐる。日本ではビルディングの上に、御殿造りの屋根を載せたりして和洋折衷のツモリでゐるが、概ね皆失敗してゐる。然るに熱河の遺蹟には、そんな不調和感がない。これは支那式と西藏式とは、型に於て幾らか似た所があるが、日本式と歐洲式とは全然型が違つてゐる事に原因がある。型の異なるものを繼ぎ合はせは成功するものではない。それは結局化學的融合とは成り得ずして機械的混和に終るのである。ところが其の化學的融合といふ事が又中々の難事であつて、それには強度の熱が要る。二個の物質を只攪き合せても混和しないが、之に強熱を加へると互に融合して別個の新物質が出来る。故に強度の熱をさへ加へれば、凡そ如何なる融合も出来ない事は無いが、只有り合せの四角いものに宮殿造りの屋根を載せたゞけでは、結局機械的混和に終る。其處には型の問題もあるが、更に又熱が足りないのである。私は是等の點から觀ても、熱河遺蹟の建築には學ぶべき多くのものがあると思ふのである。

單に乾隆帝時代の建築といふだけの事ならば、支那内地にも外に無數にあるが、それ等の多くは、所

謂る様によつて葫蘆をえがく變哲もないものである。然るに其れが、特に熱河に限つて成功してゐるのは面白い。それは支那内地に於ての建築は、皇帝が北京の王城にゐて四百餘州を睥睨するやうな態度で漢民族相手に緊張した心持で造るから、勢ひ漢民族の好みに迎合する事となつて、型に倣るのは當然である。ところが足一たび長城を越えると、最早蒙古人・西藏人が相手であつて、玉座で饒子張る必要もなく、自由に打寛いだ氣持でゐられる。其處に其の結果として面白い建築が出来るのである。斯様に色々の方面から觀て、意味の深い建築であるから、之を失ひ去るのは實に忍びない事である。

世間では日滿不可分とか、兩國は切つても切れない關係にあるとか云ふが、果してさうならば、これ程までに貴重な建築物が滿洲國にあつて、而も同國では金がない爲に見す見す之を壊滅に委してゐる有様であるのに、それを日本人が拱手傍觀してゐてもいゝものであらうか。私は其の事を考へて、何とかして之を救ふ方法がないものかと、各方面に相談して見たが、結局日本人だけが如何に躍起となつても何もならぬといふので、依然行き惱みの状態にある。恐らく今後數十年の後には何とか成るかも知れないが、其の時は既に保存の手を待たずして、壊滅の運命が訪れた後であらう。私の微力を以てしては、所謂の大廈の將に倒れんとするは一本のよく支ふる所にあらずであるが、どうか諸君に於かせられても、此の重要な熱河遺蹟の保存に就て後援して戴きたいものである。

勅題 田家雪

となり家へかよひ路ひらく人見えて

武安 亥平

雪しづかなり小山田の里

石原 重俊

若ゆきにしつかふせ屋もあらたまり

みゆるかきりはま白なりけり

田代 喬三

雪かむる山の里にも新春の來て

戸毎にひらめく日の丸の旗

歳旦 試吟

同

初雪にほてる心の子供かな

雪かむり色さえにけり寒椿